

『枕草子』『中納言参り給ひつ』

1、はじめに

・作者：清少納言

・成立：平安時代（1001年ごろ）にはほぼ完成していたか

〔平安時代は794～1185年ごろ〕

・ジャンル：随筆

・特徴：平安時代中期に中宮定子に仕えた清少納言が書いた随筆。本来は「まぐらそつし」と呼ばれる。『枕草子』は『源氏物語』の心情的な「ものあはれ」に対して、知性的な「をかし」の世界観を作った。前者は、見て聞いて感じたものをしみじみと思うような感覚で、後者は、感じたものを客観的に捉え表現するようなものと言われる。

・要約

中納言隆家が中宮定子のもとに持ってきた扇の骨を、隆家は「誰も見たことのないほどの骨」だと自讃するので、わたし（清少納言）がへへびげの骨のみうだ」と言ったところ隆家に感心された。これを自分で書くのは恥ずかしい。

2. 1、本文

中納言参り給ひて御扇奉^{おほんあふまたてまつ}らは給ふに、「隆家^{たかいえ}こそいみじき骨は得^えて侍^{はへ}れ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろびの紙はえ張るまじけれ、求め侍るなり。」と申し給ふ。「うかやうにがある。」と問ひ聞かせ給へば、「すへてうみじき侍の。』おのひにまだ見ぬ骨のそまなり。』」となむ人々申す。まじとにかはかりのは見え侍りし。「と」言^{いひ}詞^{ことば}へのたまへば、「おつは扇のにはおぼろび、海月^{うみづき}のななり。」と聞^きゆれば、「これは隆家^{たかいえ}が言^{いひ}詞^{ことば}にむ。」とて、笑ひ給ふ。

かやうのいふそは、かたはうらたま^{たま}いとのうちに入れしべけれど、「しな落^{おち}とし。」と言^いへば、いかがはせむ。

中納言^{※1}参り給ひて^{※2}御扇^{おほんあぶまたてまつ}奉らせ給ふに、「隆家^{たかいえ}こそいみじき骨は得て侍^えれ。それを張ひせて参ひせ^{☆1}むすむ²。おほひびの^{☆2}紙はえ張るまじけれ^{☆3}は、求め侍るなり。」と申し給ふ。「ういかぜつ⁴かある^{☆4}と問ひ聞^いえとせ給入^{※3}ば⁵すへて^{☆5}いみじう侍り。』⁶ち^{☆6}まだ見ぬ骨のたまなり。』となむ人々申す。まことにかばかりのは見えぬり。う⁷海月^{くづいづ}のななり。』⁴と聞^いゆれば、⁷われは隆家が言^いこ⁸て⁹むすむ¹⁰と¹¹笑ひ給ふ。

かぜつ¹²のい¹³と¹⁴そ¹⁵は、かたはらいたま¹⁶こと¹⁷のうちに入れつべけれど^{※5}、「¹⁸つな落としそ

と¹⁹言^い入²⁰は、²¹い²²かがはせむ²³☆。

3、補足・注／重要単語・文法

【補足・注】

※1…平安時代の歌人で保昌の妻。『和泉式部日記』を書く。なお前夫はたちほなのみちをた橋道貞。

【重要単語・文法】

☆1 「参り」「∴」「来」の謙讓語「参る」の連用形

5. 1、本文と現代語

中納言(隆家)が(中宮定子のもとへ)参上なさつて、御扇を(中宮定子に)差し上げなされるとき、「隆家はすばらしい(扇の)骨を手に入れてあります。それに(紙を)張り

中納言参り給ひて御扇奉らせ給ふに、おほんあふまたてまつ**隆家、**たかいえ**そいみじき骨は得て侍れ。**え**それを張り**

せて(定子様に)差し上げるつもりですが、並大抵の紙は張ることができないので、その骨にふさわしい紙を(求めております)。「と申し上げなせぬ。

せめて参りせばとすむるに、おほひびの**紙はえ張るまじけれ、****求め侍るなり。**」と申し給ふ。

(中宮定子が)「その骨はどのようなものか。」「とお聞きになると、「たいへんすばらしいです。」「中宮定子が)「それまで見たことのない

「うかがひてかある。」と問ひ聞いせとせ給へば、**「すへつらみこひ毎の。」**』**ちひまだけ見ぬ**

骨の様子です。』と人々が申す。本当にこれほどのものは見たことがない。』と舌高へおしこめるので、

骨のをまなり。』となむも人々申す。**まじつとわかばかりのは見えたり。』**と言詞へのたまへば、

(私が)「それではあるならは扇の骨ではなく、海月の(骨)であるやうだ。』と申し上げるに、「これを隆家の發言に聞こつておもしろい。』と

「ちひまは扇の骨はあつた、海月のなる。」と聞いゆれば、「これは隆家が言ひつた。』と
こゝろ、笑ひなれぬ。

して、笑ひ給ふ。

このちひまの骨は、ちひまが悪いらしいの中に入れておくべき(記録したくないことなの)だが、「いつも書
き留めなす。」

かたはらつたまじつとちひまのしちへんれしつけれど、「しつな落しつた。」

と言ひ、**「うかがはせぬ。」**

と書へば、うかがはせぬ。

5.2、本文と現代語訳

中納言(隆家)が(中宮定子のもとへ)参上なさつて、御扇を(中宮定子に)差し上げなるとき、「**隆家はすばらしい**(扇の(骨を手に入れて)います。それに

中納言※¹**参り給ひて**※²**御扇奉らせ給ふに**、**隆家**†**そいみじき骨は得て侍れ**。それを

(紙を)張らせて(定子様に)差し上げるつもりですが、並大抵の紙は張ることができないので、(その骨に)ふさわしい紙を(求めて)おります。

張ひせし参り給ひて、**御扇奉らせ給ふに**、**隆家**†**そいみじき骨は得て侍れ**。それを

と申し上げなると。 (中宮定子が)「その骨はどのようなものか。」とお聞きになると、「たい入んすばらしいわね。」

と申し給ふ。「**うううううううう**」と聞き覚えさせ給へば、**すす**と入つて**うううう**と侍

ます。』**申したく**今まで見たことのない骨の様子です。』と人々が申す。本当にこれほどのものは見たことがなく。

り。』**わい**†**わい**。†**まだ見ぬ骨のたまなり**。』**となむ人々申す**。まことに**かばかり**のは見えぬの

と声高におうしやると。 (私が)「**そ**」とういふならは扇の骨ではなく、海月の(骨)であるようだ。「と申す上は、」

う。』**と**聞へた**海月のななり**。』**と**聞ゆる**わが**、

「**わ**を隆家の**発言**†**と**申す**こと**、**笑**こななぬ。

「**わ**は隆家が**言**†**こと**、**笑**ひ給ふ。

こののういふは、**わ**が**悪**いことの中に入れておへべき(記録したくないことなの)だが、「**う**も書かぬ」。

かの**う**いふは、**か**たは**う**た**ま**い**う**の**う**つ**す**に**入**れ**つ**べ**け**れ**ど**、**う**し**な**落**し**そ

。』**う**いふ**は**、**う**か**が**は**せ**む**せ**む**。**」⁸

†() = 書へておきなう。

6、品詞分解

単語	品詞等
和泉式部、	名詞
保昌	名詞
が	格助詞
妻	名詞
にて、	格助詞
丹後	名詞
に	格助詞
下り	動詞・四段・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
ほど	名詞
に、	格助詞
京	名詞
に	格助詞
歌合	名詞
あり	動詞・ラ変・連用形
ける	助動詞・過去・連体形
に、	格助詞
小式部内侍	名詞
歌詠み	名詞

7、和歌の修辞法

大江山 いくのの道の 遠ければ

まだふみも見ず／
あま 天の橋立
はしだて

【解釈】

大江山を超えて生野を通っていく道は遠いので、まだ天の橋立へ踏み入ってみたことありませぬし、母からの文も見せていません。

【修辞法】

○掛詞

「**つゞ**」…地名の「生野」と「行く」

「**ふみ**」…「文」と「踏み」

○四句切れ

○倒置法…四句目と五句目が倒置

○体言止め…「天の橋立」

○縁語…「踏み」は「橋」の縁語

8、参考

・教科書 『新編古典B』(2015) 東京書籍

・教科書 『古典B古文編』(2017) 数研出版

・『明治書院版教科書ガイド新精選古典B古文編』(2019) 真珠書院

・『原色小倉百人一首』(2016) 文栄堂

